

Ramnet-J

NEWSLETTER

日本最南端のラムサール条約湿地 石垣島の名蔵アンパルを未来へつなごう！

アンパルの自然を守る会共同代表 島村賢正

石垣島が誇る日本最南端のラムサール条約湿地「名蔵アンパル」に重大な危機が迫っています。

石垣島の西部に位置する名蔵アンパルは、於茂登連山（バンナ岳）前勢岳を水源域として、沈水カルストで注目されている名蔵湾から長大な砂嘴によって仕切られた広大な汽水性湿地です。そこには干潟・マングロープ林・塩性草地などの多様な湿地環境が広がり、多くの水生生物や鳥類などに、かけがえのない生息空間を提供しており、国指定の鳥獣保護区に指定され、2007年には「西表石垣国立公園」に編入されました。

汽水域であるアンパルには、満潮時に多くの外海の魚類が採餌や繁殖のために入って来ますが、ヤエヤマヒルギやオヒルギなどが優占するマングロープ林では、複雑に絡み合った支柱根や呼吸根が静穏な水環境を作って稚魚や稚ガニ、稚貝の成長を助け、「海のゆりかご」とも呼ばれ、多くの底生動物や魚類の生息を支えています。

一方、砂泥質の干潟にはコメツキガニやシオマネキ類など多様なカニ類が生息し、琉球列島を代表するカニ類の宝庫となっています。さらにカニ類をはじめとする豊富な小動物群は、シギ・チドリ類やサギ類など



リュウキュウコメツキガニ



子どもアンパル観察会

開発事業計画が湿地南部の重要な水源域の前勢岳北斜面で進行しています。この大規模開発事業は、前勢岳北斜面の約6割にも及ぶ127haもの広大な土地に、18ホールのゴルフ場の他、最高40mにも達する中高層ホテル6棟や何棟ものプール付ヴィラなど、多くのレジャー施設を建設するものです。事業主体は(株)ユニマツプレシヤスという民間企業ですが、石垣市の行政当局は市民には告知することなく、裏ワザ的な行政手法を駆使して、農地法等による法規制を緩和させようと画策するなど、全面的にバックアップしてきました。いままでもなく、この開発事業は自然を大規模に破壊し、SDGsを完全に否定する時代錯誤のシロモノであり、計画発表当初から赤土汚染・地下水の枯渇や汚染・夜間照明による光害（ホタルなどの動植物や農作物、石垣島天文台への影響）など、極めて多岐にわたる深刻な問題点が指摘されてきました。とりわけ膨大な地下水の汲み上げは、アンパルのみならず名蔵湾の生物多様性に富む豊かな生態系を徐々に変化させ、長期的には致命的な影響を与える可能性は否定できません。さらに、事業

者の杜撰な環境影響評価に対しては、多くの厳しい「県知事意見」が提示され、事業者の環境保全に対する不誠実な対応が浮き彫りになっています。早期着工の動きが伝えられたため、本会は昨年9月から「我がいやいまの自然環境を考える会」とともに、開発事業反対の緊急署名を地元や県内外の皆さんに呼びかけ、年末までに書面とオンラインを合わせて約1万3000名の署名を集めました。島では「あんぱるぬみだがーまゆんた」という民謡が歌い継がれています。この話はアンパルに生息するカニを擬人化した「ゆんた（労働歌）」です。主人公の「みだがーま（目高蟹）」の生年祝いに、15種類ものカニたちが宴会の各係を担う様子が見事に謡われています。このように、名蔵アンパルは古くから島の人々に潮干狩りや行楽地として親しまれてきた憩いの場・心の拠り所であり、このアンパルの良好な環境を守り未来へつなぐことは、石垣島の伝承文化を守り育てることであります。本会は2009年の結成以来、児童生徒や市民に対する観察会や講演会、展示会の実施、清掃活動などを通じてアンパルや石垣島の自然の大切さを広報してきました。石垣島を愛する全世界の皆さん、石垣島の自然を永遠に守り抜くために、大規模開発事業反対の緊急署名と友人・知人への呼びかけをお願い致します。



バンナ岳からアンパル、名蔵湾、屋良部半島を望む



名蔵大橋上空から前勢岳（中央右）を望む。手前はアンパル湿地、右は名蔵湾

多くの鳥類の餌となつて豊かな鳥類相を支え、国内では八重山諸島のみ生息する国指定特別天然記念物のカンムリワシやクロツラヘラサギ・ブロンズトキなどの希少種も貴重な餌場としてアンパルを利用しています。このように、アンパル湿地は文字通り石垣島の「島人の宝」と呼ぶべき存在ですが、この宝に致命的な危機をもたらす無謀な大規模



オンライン署名のQRコード

沖縄沿岸に大量に漂着している 軽石の問題について

琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底研究施設 山城秀之



海面を漂流および砂浜へ漂着した軽石の様子
(10月30日、沖縄島大宜味村)

一生に一度あるかないかの軽石大量漂着に關し、サンゴを研究している立場からまとめてみました。はじめに経緯です。小笠原諸島福徳岡ノ場の海底火山は、これまで度々噴火しています。1986年1月の噴火の際も、5月には軽石が沖縄に漂着しています(加藤1988)。今回の国内における戦後最大級の噴火が起きたのが2021年8月13日、約1000km離れた大東島に10月4日流れ着き、奄美群島喜界島で10月10日、そして約1400km離れた沖縄島には10月13日、以降、日を追うごとに事態は深刻となり、その様子は刻々とニュースに流れました。漂流状況や漂着状況は、流れや風向きによってめまぐるしく変化するため、沖縄島に限っても全体を把握するのは困難な状況です。しか

し量の大小と時差はあるものの、11月には宮古島や石垣島など、12月には伊豆諸島の海岸で確認されるようになりました。表層を漂うため、北風が卓越する場合、北向きに開いている入り江、河口、漁港および海岸で多くの漂着が見られます。通常の漂着物と異なり、膨大な量が吹き寄せられ、その圧力で河川の奥まで到達した場所もあります。沖縄島北部の海岸では、打ち上げられた軽石が厚さ70cmに達している場所も確認できました。



中性浮力となり海中を漂う軽石
(10月26日、沖縄島大宜味村)

サンゴへの影響は長期的に追跡しないとわかりませんが、現時点で目立った影響(死亡、白化、傷)はないようです。海面を覆い尽くしている場合、その下は真っ暗になり、共生藻の光合成産物に栄養を頼っているサンゴには、少なからず影響があるかもしれません。滞留している場所の海面下の光量はほぼゼロでした。また、大潮の干出時に軽石がサンゴと擦れる場合や、中性浮力となり水中で漂っている場合、また浮力を失って海底に堆積した場合など、さまざまな状況があり注視する必要があります。



大潮の干潮時(深夜)に干出した枝状サンゴにまとわりつく軽石
(11月5日、沖縄島今帰仁村)

現在、特にその影響が懸念されている場所は、軽石が大量に安定

社会的に堆積あるいは滞留している干潟やマングローブなどの浅瀬です。干満による上下運動や直接底質が覆われる場所の場合、エビ、カニ、ウニなどへの物理的影響は避けられないです。これらの底生生物の個体数あるいは行動への影響が懸念されます。

社会への影響も甚大で、コロナ禍第5波から抜け出したところへの軽石漂着は、観光業、水産業そして船舶の運行中止にまで及んでいます。養殖魚の大量死も起こり、鰓(えら)あるいは餌と間違えて食べて消化管が詰まったことが原因とのことです。サンゴ礁の美しい白い砂浜が灰色に覆われるのはかなりショックなことでした。個人的に経験したことも記しておきます。サンダルの間に軽石が入ると痛いた

め砂浜は歩きにくくなりました。またスノーケリング中に排水弁に軽石が詰まり、逆にそこから海水が入りっぱなしとなり危険な状態になることもありました。滞留している場所を泳いだ際は昼間でも暗黒のため、恐怖を感じました。県や市町村は莫大な予算を投じて、軽石の撤去や除去対策を行っています。県議会は12月2日に27億円の補正予算を可決しましたが、今後も続く軽石問題の先行きは見通せない状況です。一方、当初懸念されていた重金属などについては、土壌環境基準以下となっております(沖縄県、11月9日公表)、ます。

マンングローブや干潟を覆う軽石(12月18日、沖縄島名護市)。メヒルギとヤエヤマヒルギの呼吸根(挿入図)

湿地のグリーンウェイブ2022 参加団体募集!

5月22日は、国連が定めた国際生物多様性の日です。毎年この日を記念して、生物多様性の保全や主流化に向けた普及啓発イベントが世界各地で開催されています。その活動を湿地にも広げることが目的に、ラムネットJでは参加団体を募って「湿地のグリーンウェイブ」というキャンペーンを行っています。4月から7月にかけて実施される湿地の保全や賢明な利用を目的とした観察会、学習会、展示会などの活動を湿地のグリーンウェイブにぜひ登録してください。湿地のグリーンウェイブでは、参加団体の情報を掲載したリーフレットを3月下旬に発行します。2020年度までは各地のイベント情報が中心でしたが、2021年度からは湿地保全についてのトピックや参加団体の紹介を中心とし、各団体の具体的なイベント情報はウェブサイトに掲載しています。詳細は、下記ウェブサイトをご覧ください。

- 申込方法: 「参加団体募集」のページ (<http://www.ramnet-j.org/gw/boshu.html>) をご参照のうえ、参加申込書をダウンロードしてメールでお送りいただくか、ウェブのフォームからお申し込みください。
- リーフレット掲載締切: 2022年2月28日(月)
- 申込先・お問い合わせ: ラムネットJ事務局 担当者宛Eメール gw@ramnet-j.org
- 詳しくは湿地のグリーンウェイブのウェブサイト (<http://www.ramnet-j.org/gw/>) をご覧ください。



軽石そのものの安全性が担保されたため、沖縄県環境部は軽石の利活用に関するアイデアを募集し公表する予定です(民間事業者および団体に限る、12月8日締め切り)。これまでに赤土の濾過材あるいは粘土質の土壌と混ぜて水を良くする土壌改良材としての利用等が挙げられています。量が膨大なため決定打となる対策を見つけることは困難と思われ、自然現象とは言え、自然環境や社会にここまで影響を及ぼす事態になることは想定していません。With コロナ&軽石が続きます。



宮舞町湿原 (北海道)

宮舞町湿原を大切に思う会 金澤裕司

別海町は北海道の東に位置する低い丘陵と湿地が入り交じる根釧原野の町です。ここは浅海に火山噴出物が堆積して形成されたと言われ傾斜はほとんどありません。

夏、小笠原付近の高気圧から吹き出す高温多湿の風が釧路沖の寒流上で急冷され霧が生じます。霧は内陸深くまで流入し、夏の根釧原野は日が射さず寒い日が続きます。高低差が小さく透水性の低い土壌は乾くことなく湿原が発達します。



上空から見た宮舞町湿原
写真提供：トラストサルン釧路 泉知明氏



希少種のムセンスゲ

別海町はほぼ全町域に牧草地が広がりその間にいくつかの小集落が散在しています。ですから原生的な環境はほとんどありません。辛うじて小さな湿地が点在しています。これらは「開拓」前の本来の自然の姿をとどめた天然の標本箱です。今回、希少種のムセンスゲが見つかったのもそのような湿原です。

ムセンスゲは、カヤツリグサ科のステで環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類です。道内では猿払、大雪山、知床半島羅臼湖周辺、根室市と4か所の生息地が知られていました。別海町は5番目の生息地で、道東では最大規模だそうです。飛び地状の分布をしている理由は本種が氷河期の遺存種だからでしょう。

ムセンスゲは2021年7月に湿原を調べた札幌の植物研究家が発見し、釧路市博物館学芸員の加藤ゆき恵氏が同定しました。これを受け8月には住民による見学会が開催され、その時「宮舞町湿原を大切に思う会」が発足しました。また、10月に文化財保護審議会が湿原を町の文化財にすべきとの決議を行いました。「思う会」は加藤氏による一般向け学習会を計画、50名を超える人が参加しました。一方、保全のために町による土地取得を求める町長宛ての嘆願書の提出にも取り組み、町内外から579名の賛同を得て10月末に提出されました。町長も保全の意義を理解して保全の方策を探るという意志を示しています。

「大切に思う会」では引き続き情報発信、会員の学び合いで湿原とその生態系への理解を広めていくことにしています。



ラムネットJ共同代表 永井光弘

報告 第16回 日韓NGO湿地フォーラム

日韓NGO湿地フォーラムが2021年12月4日、5日の2日にわたって開催されました。コロナ禍のため今回も対面ではなく、日本・八代市、韓国・仁川市の拠点を中心にZoomで結んでの開催となりました。

初日はホストの韓国側KWNN(韓国湿地保護連合)提案の「湿地保護区」をテーマに報告が行われました。

まず、総論としてエココリアのハン・ドンウク氏が、生物多様性条約会議(CBD)で議論中のポスト2020世界生物多様性枠組(GBF)の保護区に関する第3ターゲット「2030年までに地球の陸域、海域そして淡水域の少なくとも30%は効果的に保護されなければならない」について、検討状況などを報告しました。これを受け、NGO「湿地と鳥の友達」のパク・チュンロク氏が韓国の湿地保護区の状況、ラムネットJの永井が日本の湿地保護区の状況を報告しました。どちらの国でも、CBD・COP10(2010愛知)以来ラムサール条約湿地をはじめ湿地保護区は拡大されつつあるものの、いわゆる保護区とされる湿地でも開発計画が進むという問題状況が報告されました(韓国ナラトングン江河口橋梁建設計画、日本の名蔵アンバル隣接地ゴルフリゾート計画など)。

次に、「湿地保護区」に関連して韓国から4本、日本から3本の個別報告が行われました。

広島県・ハチの干潟では近接してLNG発電所の浮体式貯蔵設備等が計画されカブ

トガニなど多くの絶滅危惧種への影響が懸念されます(広島大学/大塚攻教授)。また、北海道・勇払原野(ウトナイ湖に隣接)の苫東厚真地区では、ローター高120mの風車を最大10基建設する風力発電所計画があり、国内希少種チュウビなど鳥類にバードストライク被害が懸念されます(日本野鳥の会/葉山政治氏)。韓国側から、ファソン湿地近隣の湿地環境、特に防潮堤が開放され海水流通のあるファソン湖でクロツラヘラサギなど609種以上の種が観察され、その保護のため2025年世界自然遺産登録を目指すとの報告がされました(ファソン環境運動連合/パク・ヘジョン氏)。チャンウォン市チュナム貯水池は、過去に渡り鳥の保護と近隣農民・漁民との間で激しい葛藤があった湿地ですが、地域環境団体の活動により2016年から各種MOU(覚書)の締結により冬みずたんぼなど水田湿地保護が進んでいます(チュナム分かち合い/チュ・ユンシク氏)。また、2006年に防潮

堤が閉じられたセマングムでは淡水化工事一辺倒と思っていたところ、北部のスラ干潟(南北6.5km、東西最大4km)につき「2020年12月30日に夜間にも水門開門を再開し公式に淡水化を放棄した」との評価もあるようです。現在もクロツラヘラサギ、ミヤコドリ、カワウソなど法定保護種がスラ干潟を利用しているとのことであれしい気持ちとなる一方、新たな空港建設計画もあるようです(セマングム市民生態調査団/オ・ドンビル氏)。その他、出水市のラムサール条約湿地登録報告、仁川市チャンス川の河川再生事業報告は、喜ばしいものでした。

2日目は、日韓のメンバーによって、本年4月末予定のCBD、11月のラムサール条約会議でのサイドイベントや、2月の世界湿地の日における共同声明などが話し合われました。積み残しの議論も多かったのですが、GBFを受けた湿地保護区・OECMの在り方など、実り多いものとなりました。



八代市の会場での発表



オンラインでの参加者 (Zoomの画面)

ヘラシギ国際シンポジウム報告

ラムネットJ事務局長 後藤尚味



2021年11月21日、「ヘラシギが集う球磨川河口を目指して」国際シンポジウムを熊本県八代市の会場とオンラインのハイブリッドで開催しました。参加者31名（うち会場6名）。

第1部の基調講演「ヘラシギとはどんな鳥？ 現状と渡り」では、ラムネットJ理事の柏木実さんが希少種ヘラシギのフラウエイ全体から置かれた状況と保全の概要を発表しました。

第2部の「世界の渡り」では、ロシアからバヴェル・トムコヴイッチさんとエレナ・ラッポさんが繁殖地、中国からジン・リーさんが中継地、そして、バングラデシユからサヤム・チョウドリーさんが越冬地のそれぞれの様子を10分にまとめた動画を上映しました。

第3部の「日本各地からの報告」では、4名からご報告を頂きました。まず、八代野鳥愛好会の高野茂樹さんが熊本県



八代市の会場（上）とオンラインの画面（下）

に飛来した鳥の観察調査記録（1970年）を基に傾向を分析し、2009年以降ヘラシギは観察できていないことを報告しました。次に、日本野鳥の会石川県支部の中村正男さんが、石川県の野鳥年鑑の調査記録を基に飛来数を報告し、餌となるナミノリソコエビの分布とヘラシギの目撃箇所の相関を報告されました。続いて、ラムネットJ会員の西井やよいさんから、瀬戸内海に突き出た岡山県の玉島ハーバーアイランドで観察されたヘラシギの様子と進行中の開発計画や代替湿地確保に向けた市民活動についてお話しいただきました。最後に、ふくおか湿地保全研究会の小山内朝香さんから、2017年と2021年にヘラシギが目撃されたポイントの環境状況と変化、今後の保全と啓発に向けた取り組みについてのお話をいただきました。

第4部の「球磨川河口にヘラシギが集まってもらうために」では、高野茂樹さんと柏木実さんを中心にクロストークを行い、これからも渡り鳥の中継地の保全活動を支えるための環境改善普及啓発、政策提言を継続的に進めていこうという意思を確認しあって閉会しました。

2月2日は 国連・世界湿地の日

2月2日は1971年にラムサール条約が採択されたことを記念する「世界湿地の日」です。昨年8月30日に国連でも「国際デー」として採択されたことから、2022年は「国連・世界湿地の日」の最初の年となります。今年の世界湿地の日のテーマは「Wetlands Action for People and Nature」。人々と自然のために積極的な湿地保全の「行動」を提起しています。世界湿地の日の資料やポスターなどは、公式ウェブサイト（<https://www.worldwetlandsday.org/>）からダウンロードできます。ウェブサイトには各国で行われる世界湿地の日のイベントも登録されています。



2022年のポスター

吉野川河口みらい講座

吉野川河口について多様な視点から考え、未来に引き継ぐ方法を見つけるために、定期的にオンラインで開催します。

第1回「底生生物からみた吉野川河口域の重要性」

- 日時：2022年1月22日（土）19:00～21:00
- お話：和田太一（南港ウェットランドグループ）
- Zoomミーティング参加設定（事前登録不要／参加無料）
<https://urlzs.com/vNXvF>
- ミーティングID：832 1167 9815 パスコード：228186
- 主催：とくしま自然観察の会／共催：ラムネットJ
- お問い合わせ：Eメール kansatsunokai@gmail.com

ラムサール・ネットワーク日本 会員募集!!

ラムサール・ネットワーク日本（ラムネットJ）の活動は、会員の皆様からの会費や、カンパ、助成金などでまかっています。ぜひ、ラムネットJのサポーター（一般賛助会員）になって会の活動を支援してください。もっと積極的に湿地保護にかかわりたい方は、会の運営や活動を担う一般正会員としての入会をお待ちしています。そのほか、団体や企業としての入会も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせください。

会員の特典

機関誌「ラムネットJニュースレター」を送付するほか、会員限定のメーリングリストに参加できます。ラムネットJが主催する催しの参加費が割引になる場合もあります。

入会申込方法

- 郵便振替 郵便振替用紙（払込取扱票）の通信欄に、ご希望の会員種別、お名前、住所、電話番号、Eメールアドレスをご記入の上、年会費をお振り込みください。一般銀行から振り込む場合は（払込取扱票への記入ができませんので）振り込み後に上記の申込事項をEメール、FAX、郵便等で右記の事務局までお知らせください。
- ウェブサイト 一般賛助会員、一般正会員については、ウェブサイトからオンラインでの入会も可能です。<http://www.ramnet-j.org/join/>にアクセスし、「入会申込フォーム」に記入して送信してください。年会費は郵便振替でご送金いただくか、ペイパルを使ってオンラインで決済することも可能です（クレジットカードも使用できます）。

振込先

ゆうちょ銀行 振替口座 00140-0-765702 ラムサール・ネットワーク日本
（一般銀行から）ゆうちょ銀行 〇一九（ゼロイチキョウ）店
当座預金 0765702 ラムサール ネットワークニホン

会員種別と入会申込金（年会費）

会員種別	正会員		賛助会員	
	総会での議決権があります		総会での議決権がありません	
一般	1口	5,000円	1口	2,000円
団体	1口	10,000円	1口	10,000円
特別	50,000円以上		30,000円以上	
企業	-		1口	100,000円

年会費（入会金）

年会費は毎年4月から翌年3月までの1年分です。入会初年度は、年度途中の入会でも入会金として1年分の会費をいただきます。2～3月に入会の場合、初年度の年会費（入会金）は無料となり、4月からの次年度の年会費としていただきます。

事務局

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11
青木ビル3F TEL/FAX 03-3834-6566
Eメール info@ramnet-j.org